

特集にあたって

第19期第12部門研究会代表者

水谷 智

本特集は、同志社大学人文科学研究所第19期（2016～2018年度）の第12研究班「脱植民地化と植民地主義の現在」の成果の一部である。一昨年に刊行された『世界史のなかの台湾植民地支配—台南長老教中学校からの視座』（岩波書店、2015年）は、そのタイトルからも分かる通り、植民地主義を「世界史」的な観点から論じることを主旨とする研究書であり、著書である駒込武による過去20年間の歴史研究の集大成である。第12研究班では、メンバーの駒込によるこの著作を、「西洋と日本の植民地主義の歴史および現代世界への影響を世界史的な観点から検討する」という共同研究の主旨に沿ったかたちで議論するために最適な方法を模索した。そして2017年7月16日に、同志社大学において「<はざま>から再考する帝国史」と題する公開シンポジウムを、科学研究費・基盤研究C「イギリス帝国と近代日本—帝国的諸事業・思想の越境的伝搬と展開」（代表：吉村真美（森本真美））、科学研究費・基盤研究B「間帝國的関係性からみた植民地支配と抵抗—比較・協力・並存・移動の史的構造」（代表：水谷智）、同志社大学人文科学研究所第19期第3研究「東アジアキリスト教伝道史基礎アーカイヴズの研究」（代表：原誠）との共催のかたちで開催した。

駒込は『世界史のなかの台湾植民地支配』において、イギリス人宣教師によって設立され日本による植民地統治下の台湾で存続した台南長老教中学校を、日本とイギリスの二つの帝国の<はざま>に位置づけて論じている。刊行以来、この著書は国内外のいくつかの研究会やシンポジウムですでに取りあげられていたが、西洋史研究者を交えての日本帝国と他の帝国との関係性を中心にした討論の場がなく、駒込のいう「世界史」の意味が十分に共有されているとは言いがたい現状があった。そこで第12研究班は、駒込が日本による統治と台湾人の植民地経験をイギリス帝国と日本帝国の「間帝国」（trans-

imperial) な関係の中に位置づけていることに着目し、駒込とイギリス帝国史研究者の学術的な対話の場としてシンポジウムを位置づけた。報告者の森本真美、並河葉子、そして水谷はいずれも当研究会のメンバーでイギリス帝国史を研究領域のひとつとしており、それぞれ「子ども期・子ども文化研究」、「宣教師研究」、「植民地教育研究」における自身の研究と関連づけながら駒込の著作について報告し、そして駒込がそれに応じた。また、対話をさらに深めるため、ゲストとして木畑洋一（国際関係史／イギリス帝国史）、廉雲玉（イギリス史）、田中智子（日本近現代史／高等教育史）の各氏をゲスト・ディスカッサントとして招聘し、聴衆も交えた討論を行った。

特集は、このシンポジウムで発表された報告およびそれへのリプライを論文としてまとめた4本の論説と、ディスカッションの音声テープの文字起こしを編集した記録とで構成されている。